



有元容子《島》2014年



有元容子《鞍瀬の頭》2017年



有元容子《甲斐駒ヶ岳》2019年

収蔵品紹介

有元容子 《島》《鞍瀬の頭》《甲斐駒ヶ岳》

当館では、2022年度に日本画家・有元容子氏（1949- ）の作品3点を購入した。以下、有元氏からの聞き取りおよび本学での講演会内容を参照して概要を述べる。

有元容子氏は1949年、愛媛県今治市の四阪島にて生まれた。今治西高等学校で高階重紀（1912-84）に石膏デッサンを学び、東京藝術大学美術学部絵画科日本画へ進学。1971年に同大学を卒業し、1977～80年まで創画会展に出品。1978、79年には、春季創画会展にて春季展賞を受賞した。また、1994～2009年まで「両洋の眼・現代の絵画」展へ出品し、1998年には河北倫明賞を受賞している。そのほかにも多くの展覧会へ出品し、個展も多数開催している。

有元氏の初期の作品は、頭の中で創り上げたイメージを画面に描き出したもので、抽象的な要素の強い作風であった。その後、唐津にて陶芸を学んだ有元氏は、そのかたわら行っていた同地の風景スケッチをもとに、陶芸で用いる土を絵の具として使用した風景画を描きはじめる。そのころの有元氏は、地上から見た山をモチーフに、現実の色彩にかかわらず、自らのイメージに沿った色で風景を描いていたが、やがて実際に山へ登るようになり、下から見上げるだけだった山との違いに衝撃を受け、自らの目で見た風景を描くようになっていった。

当館で購入した《島》《鞍瀬の頭》《甲斐駒ヶ岳》の3点は、いずれも有元氏自身が山へ登り、描いた作品である。

《島》（図版Ⅰ） 紙本着色、画面寸法 89.8×115.6cm、額、画面右下に金泥で落款「容」 初出：「有元容子日本画展2014—山の風・海の風—」日本橋三越、2014年

本作は瀬戸内海の大島にあるカレイ山山頂の展望台から東を見晴るかした風景を写したもので、中央に大きく描かれているのは鵜島。その右下には能島と鯛崎島が続き、左奥には造船所のクレーンなどが描き込まれた伯方島が、右奥には大島の岬が表される。鵜島周辺は潮の流れが速く、有元氏は力強い筆致で海流を表し、砕ける波飛沫を胡粉によって表現している。また、本作では画面全体に、刷毛目を残すようにして薄く絵の具が塗られており、独特な仕上がりの画面となっている。

《鞍瀬の頭》（図版Ⅱ） 紙本着色、画面寸法 64.2×89.9cm、額、画面右下に金泥で落款「容」 初出：「第29回現代美術展」今治市河野美術館、2017年

本作に描かれているのは、愛媛県にある堂ヶ森山頂から石鎚山との間にある鞍瀬ノ頭を望んだ夏の風景。有元氏は色の変化ではなく、筆遣いによって山肌などを表すことを重視しており、本作においても筆触を活かした絵肌づくりがなされている。

《甲斐駒ヶ岳》（図版Ⅲ） 紙本着色、画面寸法 115.7×79.6cm、額、画面右下に金泥で落款「容」 初出：「第31回現代美術展」今治市河野美術館、2019年

描かれているのは春の甲斐駒ヶ岳で、前景にはすでに青々と葉を繁らせた山が配され、中景に連なるのは今まさに芽吹きはじめた山々。さらに遠景にはいまだ雪深い山が聳え、標高の違いによる季節の移ろいが写し取られている。本作において有元氏は、とりわけ前景の山の表現に苦心したといい、何度も絵の具が塗り重ねられている。また、有元氏は雲の表現にも力を注いでおり、遠景の山肌をなめるようにして流れる雲は、山頂付近で吹き荒れる凍てつく風を感じさせ、のどかな前景との対比がより一層強められている。

（学芸員 田所 泰）